

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
局所麻酔成分	アミノ安息香酸エチル	軟膏はあるが、ここでは痔疾用薬であるのでアネステジン「ホエイ」内服で代用	局所麻酔薬であり、痛感温度感覚を制御して作用を発現する。				頻度不明(食欲不振、悪心、口渇、便秘、下痢、メトヘモグロビン血症)	頻度不明(過敏症)			・本剤に対し過敏症の既往歴 ・乳幼児(メトヘモグロビン血症をおこすおそれ)	高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人				長期連続投与は避ける。		通常、成人にはアミノ安息香酸エチルとして、1日0.6～1gを3回に分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。 高齢者では減量するなど注意すること。	下記疾患に伴う疼痛・嘔吐 胃炎、胃潰瘍

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
局所麻酔成分	塩酸ジブカイン	ベルカミン注 表面麻酔に類似のため使用	感覚・求心神経繊維のNa ⁺ チャンネルを遮断することにより局所麻酔作用を発現する。効力、持続性、毒性いずれも最大級の局所麻酔薬であるが、より効力を強めるために局所鎮痛以外の目的にはエピネフリンを添加して用いる		振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眩暈、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、尋麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質。高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。							使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 仙骨麻酔 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10～30mgを使用する。 伝達麻酔 (基準最高用量: 1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人3～40mgを使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量: 1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人1～40mgを使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1～2%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人1～5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、0.1%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人男子10～20mg、女子3～7mgを使用する。 ・膀胱粘膜麻酔には、0.025～0.05%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10～20mgを使用する。 ・局所鎮痛には、0.025～0.05%液を用い、適量を使用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、伝達麻酔・浸潤麻酔には塩酸ジブカインとして、通常成人1～2mgを使用する。	仙骨麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化 に伴う使用 環境の 変化	
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
局所 麻酔 成分	塩酸プロカ イン注「ホエ イ」 局所麻酔に 類似のため 使用	合成局所麻 酔薬の原型 であり、感覚・ 求心神経線 維のNa ⁺ チャ ネルを遮断し、活動電位 の伝導を抑制 することにより局所麻酔 作用を発現する。粘膜への 浸透性が悪いので表面麻 酔としては無効である。代 謝産物が血管拡張作用 を有し、速やかに吸収され るのでエピネフリンの添加 が必要である。			振せん、痙れ ん等の中毒 症状(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(ね むけ、不安、 興奮、霧視、 めまい、悪 心・嘔吐、メ トヘモグロビン 血症)	頻度不明(過 敏症)			重篤な出血や ショック状態(腎 臓、硬膜外麻酔 時：症状が悪化)、 注射部位またはそ の周辺に炎症(腎 臓、硬膜外麻酔 時：効果が激激に 発現)、敗血症の 患者(腎臓、硬膜 外麻酔時：敗血症 性の髄膜炎がおこ るおそれ)、メトヘ モグロビン血症(腎 臓麻酔を除く) (症状が悪化する おそれ)、本剤また は安息香酸エステ ル(コカインを除く) 系局所麻酔薬に 対し過敏症の既往 歴	高齢者、妊婦また は妊娠している可 能性のある婦人、 妊娠末期の婦人					使用に際し、目的濃度の 水性注射液として使用する。 脊髄麻酔(腰髄麻酔) 5~10%注射液とし、通 常、成人には塩酸プロカ インとして、低位麻酔には50 ~100mg、高位麻酔には 150~200mgを使用する。 硬膜外麻酔 (基準最高用量：1回 600mg)1.5~2%注射液と し、通常、成人には塩酸プロ カインとして、200~ 400mgを使用する。 伝達麻酔 1~2%注射液とし、通 常、成人には塩酸プロカ インとして、10~400mgを 使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量：1回 1,000mg)0.25~0.5%注 射液とし、通常、成人には 塩酸プロカインとして、1回 1,000mgの範囲内で使用 する。歯科領域麻酔 2%注射液にエピネフ リンを添加したものを 用い、伝達麻酔、浸潤麻酔に は、通常、成人には塩酸プロ カインとして、10~100mg を使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 必要に応じエピネフリン (通常濃度1:10万~20万) を添加して使用する。	脊髄麻酔(腰 椎麻酔)、硬膜 外麻酔、伝達 麻酔、浸潤麻 酔における伝 達麻酔、浸潤 麻酔	
リドカイン	キシロカ イン液「4%」 表面麻酔に 類似のため 使用	神経膜のナ トリウムチャ ネルをブロック し、神経にお ける活動電位 の伝導を可 逆的に抑制し、 知覚神経及び 運動神経を遮 断する局所麻 酔薬である。表 面・浸潤・伝 達麻酔効果は、 塩酸プロカ インよりも強 く、作用持 続時間は塩 酸プロカイン よりも長い。			意識障害、振 戦、痙攣(頻 度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眩 暈、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐)	頻度不明(過 敏症)			本剤の成分又はア ミド型局所麻酔薬 に対する過敏症の 既往歴。	高齢者又は全身状 態が不良。心刺激 伝導障害。重症の 肝機能障害又は腎 機能障害。幼児。 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人。					過量投与で中 毒症状が現れ る。症状として中 枢神経系(不安、 興奮、意識消 失、全身痙攣な ど)、心血管系 (血圧低下、徐 脈、循環虚脱な ど)が現れる。 眼科(点眼)用 として使用しない こと。注射用とし て使用しない。	塩酸リドカインとして、通常 成人では80~200mg(2~ 5mL)を使用する。 なお、年齢、麻酔領域、部 位、組織、体質により適宜 増減する。 幼児(特に3歳以下)では 低用量から投与を開始。	表面麻酔

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化									
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの				過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ
抗炎症成分	塩化リゾチーム	レフトーゼ錠	抗炎症作用: 癰疽形成・組織修復作用: 膿粘液の分解と排出作用: 出血抑制作用														1.慢性副鼻腔炎の腫脹の融解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、60~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿器科領域)の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量
グリチルリチン酸	軟膏のみなので、グリチルリチン酸モノアンモニウム(グリチロン注一号)を使用	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアミド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)			偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)					高齢者、妊婦小児等	長期運用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
			重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ				薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)				症状の悪化 につながるお それ
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
抗炎症成分	<p>酢酸ヒドロコ ルチゾン</p> <p>コトドール錠 外用痔疾用 薬なのでヒド ロコルチゾン の内服で代 用</p> <p>抗炎症・抗ア レルギー作用 を示す糖質副 腎皮質ホルモ ンである。副 腎摘出ラットの 肝に対する 本薬の糖原 増加作用はコ ルチゾンの約 1.5倍であり、 ラット綿球肉 芽腫に対する 抗炎症作用 はコルチゾン の約1.3倍で ある。</p> <p>ヒドロコルチ ゾンの糖質副 腎皮質ホルモ ンとしての作 用は弱く、副 腎摘出イヌに 対する生命維 持作用はデ オキシコルチ コステロンの 約0.04倍であ る。</p>			<p>感染症、続 発性副腎皮 質機能不全、 糖尿病、消化 性潰瘍、骨粗 鬆症、大腸骨 及び上腕骨 等の骨頭無 菌性壊死、ミ オパチー、 緑内障、後囊 白内障、血 栓症(頻度 不明)</p>	<p>頻度不明(過 敏症)</p>		<p>本剤の成分に対し 過敏症の既往歴 原則禁忌 有効な抗菌剤の存 在しない感染症、 全身の真菌症、結 核性疾患、単純泡 疹性角膜炎(感染 症を増悪させるお それ)、消化性潰瘍 (潰瘍を増悪させる おそれ)、精神病 (精神病を増悪さ せるおそれ)、後囊 白内障の患者(白 内障を増悪)、緑内 障(眼圧を上昇)、 高血圧(血圧を上 昇)、電解質異常 (低カリウム血症 等)、血栓症(血栓 症を増悪させるお それ)、最近行った 内臓の手術(創 傷治癒を障害させ るおそれ)、急性心 筋梗塞(心破裂)</p>	<p>感染症、糖尿病、 骨粗鬆症、腎不 全、うっ血性心不 全、甲状腺機能低 下、肝硬変、脂肪 肝、脂肪塞栓症、 重症筋無力症、高 齢者への長期投 与、妊婦又は妊娠 している可能性の ある婦人、授乳婦、 小児</p>	<p>水痘又は麻 疹の既往の ない患者に おいては、水 痘又は麻疹 への感染を 極力防ぐよ う常に十分な 配慮と観察を 行うこと。</p>		<p>運用後、投与を 急に中止すると、 ときに離脱症状 があるため、 徐々に減量する など慎重に行な うこと。</p> <p>高齢者への 長期投与・感 染症の誘発、 糖尿病、骨粗 鬆症、高血圧 症、後囊内障 障、緑内障等 の副作用発 現。 小児への長 期投与・頭蓋 内圧亢進症 状</p>	<p>通常、成人にはヒドロコ ルチゾンとして1日10～ 120mgを1～4回に分割して 経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。</p>	<p>1.慢性副腎皮 質機能不全 (原発性、続発 性、下垂体性、 医原性)、急性 副腎皮質機能 不全(副腎ク リーゼ)、副腎 性器症候群、 亜急性甲状腺 炎、甲状腺疾 患に伴う急性 眼球突出症、 ACTH単独欠 損症 2.慢性関節リ ウマチ、若年 性関節リウマ チ(スチル病を 含む)、リウマ チ熱(リウマチ 性心炎を含む) 3.エリテマト ーデ(全身性及 び慢性円板 状)、全身性血 管炎(大動脈 炎症候群、結 節性動脈周囲 炎、多発性動 脈炎、ウェゲナ 肉芽腫症を含 む)、多発性筋 炎(皮膚筋 炎)、強皮症 4.ネフローゼ及 びネフローゼ 症候群 5.気管支喘 息、薬剤その 他の化学物質 によるアレルギー ・中毒(薬 疹、中毒を含 む)、血清病 6.重症感染症 (化学療法と併 用する) 7.溶血性貧血 (免疫性又は 免疫性機序の 疑われるもの)、 白血病 (急性白血病、 慢性骨髄性白 血病の急性転 化、慢性リンパ 性白血病)(皮 膚白血病を含 む)、顆粒球減 少症(本剤性、 続発性)、紫斑 病(血小板減 少性及び血小板 非減少性)、再 生不良性貧血</p>	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
																		8.限局性腸炎、潰瘍性大腸炎 9.重症消耗性疾患の全身状態の改善(終末期、スフルーを含む) 10.慢性肝炎(活動型、急性再燃型、胆汁うっ滞型)(但し、一般的治療に反応せず肝機能の著しい異常が持続する難治性のものに限る)、肝硬変(活動型、難治性腹水を伴うもの、胆汁うっ滞を伴うもの) 11.サルコイドーシス(但し、両側肺門リンパ筋腫脹のみの場合を除く) 12.肺結核(粟粒結核、重症結核に限る)(抗結核剤と併用する)、結核性胸膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性腹膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性心臓炎(抗結核剤と併用する) 13.脳脊髄炎(脳炎、脊髄炎を含む)(但し、一次性脳炎の場合は頭蓋内圧亢進症状がみられ、かつ他剤で効果が不十分なときに短期間用いること)、末梢神経炎(ギランバレー症候群を含む)、筋強直症、多発性硬化症(視束脊髄炎を含む)、小舞蹈病、顔面神経麻痺、脊髄網膜炎 14.悪性リンパ腫(リンパ肉腫症、絨網肉腫症、ホジキン	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
																		病、皮膚細菌症、菌状息肉症)及び類似疾患(近縁性肉芽腫、乳癌の再発転移 15.特異性低血糖症 16.原因不明の発熱 17.副腎摘除、副腎皮質機能不全患者に対する外科的侵襲 18.蛇毒・昆虫毒(腫症の虫さされを含む) 19.卵管整形術後の癒着防止 20.★湿疹・皮膚炎群(急性湿疹、亜急性湿疹、慢性湿疹、接触皮膚炎、貨幣状湿疹、自家感作性皮膚炎、アトピー皮膚炎、乳・幼・小児湿疹 21.内眼・視神経 22.急性・慢性中 23.難治性口内 ★印の附されて	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ			適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性										